

BODY WILD

Vol.1

TrialVersion

Text:TokyoKomachi

illustration:KamuiNatsuki

Gun supervision:KarinoFuetaro

目次

用語集	3
第一話「生身の男」	4
第二話「ピアノ・レッスン」	36
次巻予告？ & 作画コメント	49
小町亭既刊物紹介	50
参考文献	51

□用語集

◆マイクロマシン

超小型機械のこと。大きさの定義はまちまちであるが、**Ⅲ**オーダーから**Ⅴ**オーダーの機械構造をいう。一般に動くものをいうが、流路などデバイス自体が動かないものも含まれる。世界的にはMEMS(Micro Electro Mechanical System)と言われるが、日本やヨーロッパでは、マイクロマシンということが多い。

◆ナノマシン

ナノマシンとは(一ナノm=十億分の一m)0.1~100nmという極々小さいウイルス程度の大きさの機械のことを指す(広義ではもう少し大きい微生物サイズのものも指す)。義体は勿論、現在は生身の人間の(主にDNAを用いた)病気の治療などにも欠かせない技術。

寸法がナノメートルオーダーの極端に小さな構造は、走査型プローブ顕微鏡(SPM)の技術などを用い原子や分子を動かすような方法で作れるが、これは「ナノマシンング」と呼ばれる。

◆電腦

マイクロマシン經由で脳の電気信号をキャッチし、集め、外部ネットワークと直接接続する機能。導入すると、他者との通信やネットワークへの接続が可能となる。電脳化した者同士であれば、自分の視覚情報や触覚、さらには感情まで相手に伝えることができる。

この技術により、有線・無線などで他者の脳の深部まで入り込むことも可能となった。コンピュータのようにウイルスを仕込んだり、不正アクセス、記憶操作(消去・書込み)、さらには身体そのものに乗っ取ることもできるようになってしまった。

これに対抗するのがいわゆるファイアーウォールの役目を果たす「防壁」と呼ばれるものである。防壁には何種類もあり、相手に対してダメージを与える「攻勢防壁」、特定の別ネットワークに強制的に転送されてしまう「転送防壁」、あらかじめ自分とネットワークの間に挟み込むことで自分に侵入されるのを防ぐ「身代わり防壁(ハードウェア)」などがある。

◆義体

身体の一部を機械と置き換えること。一部分のみの場合は「部分義体」、全身(脳と脊髄の一部を除く)の場合は「全身義体」(いわゆる「サイボーグ」と同意)と呼ばれる。全身義体化する場合は、電脳化することが必須となる。

身体全体のうち、どのくらいを義体化しているかを示す指標を「義体化率」と呼ぶ。全身義体を九十八パーセントとし(残り二パーセントは脳)、部分になることに減っていく。PMC(民間軍事企業)の採用条件には、義体化率が指定されている場合もある。

◆支援AI

電腦内において、一定のコマンドを人に代わって行うプログラム。簡単なマクロのようなものもあれば、人工知能を搭載してある程度人と同じ思考を持つて自動的に状況判断し動くものもある。

◆IRシステム(Integration Recording System)

各種主要道路、コンビニ、銀行、ATM、駅等公共施設等に取り付けられた監視カメラを一括管理するシステム。開発元は通産省で、管理も通産省が行っているが、警視庁もこのシステムを利用することができる。また電脳化している警察官は自らが見ているものをIRシステムに送り込むことができ、捜査や逮捕の記録としても使われる。

◆電族

ハッカーとほぼ同意だが、悪意を持った行動しか起こさない者を特にこう呼ぶ。

◆ガインノイド

アンドロイド(ロボット)の中でも特に女性型のもののことを言う。性行為機能がついているガインノイドをセクスアロイドという。

俺は
少しの孤独感
少しの無関心

手一杯の不満
でも皆がこの傷跡を見ることができるとは

どうしようもない
俺は

君に欲してもらいたいもの
君に感じてもらいたいもの

でもなんだか
俺が何をしようとも

それが現実だつて
君に信じさせることはできないみたいだ

だから俺は諦めて
君を見ている

君はいつもどおりに背を向けた
顔を背けて俺が見ていないような振りをした

でも俺はここにいますよ
俺には君しかいないから

第一話 「生身の男」

— もりそば男と二人の全身義体

東京、銀座。

平日でも中国や韓国からの観光客が絶えないこの地は、お昼ということもありかなりの賑いを見せていた。

いくつもの立ち並ぶビルの隙間を縫っていくと、なかなか見つけることは難しい蕎麦屋がある。その蕎麦屋は知る人ぞ知る名店で、「白山」といった。

店内は年齢層が高めの、スーツのサラリーマンで埋め尽くされていた。OLが来るような店ではない。また、安月給サラリーマンが来るような

店でもない。いる客は大体が部長クラスと推測される。その部長の奢りなのか、やたら若い客がいるテーブルもある。

その中のペア席に、向かい合って座っている二人のスーツのサラリーマンの姿があった。

もりそばを食べている男は白髪交じりのグレーの髪で、前髪だけ立てている。着ている灰色のスーツはお世辞にも高級品といえるものではない。さそうだ。ズボンのプレスもすっきりよれよれになってしまっている。よく日焼けした浅黒い肌で、左手首に少し大きめの時計のようなものはめている。地味な柄のネクタイをし、暑苦しいのか若干緩めている。靴だけは最近新調したのか、やたら光っていてまだ新しい。ワイシャツの下に着ているランニングの首元のU型が透けて見え、ツキノワグマのようになっている。

その真正面に座った男は、もりそば男よりはかなり若い。真っ黒な髪をやや長めに真っ直ぐに伸ばし、前髪は横へ流している。ヒンジの部分の形に特徴がある眼鏡、Soc (スリーナイン) の黒いメタルフレームの眼鏡をしている。スーツはかなり金がかかっているような細めのピンストライトで、オーダーかもしれない。上着のボタンをはめていないので、ベストも着ていることが見て取れる。しっかりと濃紺のネクタイをしている。靴はオーソドックスなローファー。彼はどうも、イギリス風の着こなしが好みようだ。線は細く、色の白いのも手伝ってか力強さはどこにも垣間見えない。彼もまた、左手首に時計のようなものはめているが、円形のプラスチックの部品の先には何かの端子がついていた。

もりそば男は正面の男の視線が気になったのか

「あともうちょっとだからな」と言った。部下の男は

「そんな、急がなくてもいいですよ」と言う。彼が部下であることは見た目からも話し方からも明らかだ。

「でも新人来るだろう？」

「あ、そうか」と言った。

もりそば男でない方の男は、何も注文していなかった。目の前にはフチが赤く細く彩られたガラスのコップに入った水だけ。
そして男は、もりそば男のことをじっと凝視していた。瞬きもせずだ。

1分経過しても、彼は瞬きをしない。そればかりか、彼はこの店に来てからもりそば男がもりそばを注文し、待っている間の雑談の時も、もりそばが来てから食べ始めても、そして今も、ずっと瞬きをしていない。

彼の瞳は、水分を必要としないのだった。何故なら、人工的に作られたものだからだ。

彼が何も注文していないのも、同じ理由だった。彼の身体には、胃という臓器は存在しなかった。代わりに、「マイクロマシン受領ユニット」という機械が入っている。

彼は、脳と脊髄以外を全て機械に置き換えたサイボーグだった。日本だと、「全身義体」という呼ばれ方もする。

もっと厳密に法的な話をすれば、義体化率（全身のうちどれだけを機械と置き換えているか）九十八パーセント以上の者を「全身義体」と呼ぶ。人間の脳は全身のうちの二パーセントの質量を持つ。脊髄は勘定に入っていない。

時に、西暦2035年。

彼のような全身義体者は日本国内だけでも全国国民の二十パーセントに達しようとしていた。

そしてもりそば男は義体化率ゼロパーセント、どこもいじっていない生身の男だった。だからこうして、普通に蕎麦を食べている。消化器系統を義体化してしまうと、もう普通の食事は採れなくなってしまう。

大森司（おおもりつかさ）は丸の内警察署を前にして、緊張をなんとかなくそうと、大きく深呼吸してみた。なんとなく身体が強張りが少なくなかった気がする。不思議なものだ。全身義体でも、生身の人間と同

じような方法が通用するなんて。

警察学校を卒業した後、七ヶ月実務経験をしているので、大森は「ピツカピツカの一年生」というわけでもなかった。大森が配属された先の交番はどういうわけかとても忙しく、いろいろな経験を積むことができた。かねてより大森は全身義体ということもあって、当時の署長自らから刑事になるための推薦をしてくれた。そして昇進試験、「捜査課講習」の受講、卒業試験の合格を経て異例のスピードで大森は刑事になった。

大森は高校生の時に全身義体化した。高いお金をかけて全身義体化したからには、それを生かした職業に就きたいと考えていた。そして大学卒業後、警官採用試験を受けたのだった。

大森は、まさか捜査一課に配属されることはないだろう、捜査三課辺りかと呑気に構えていた。

皇居を望む、千代田区を主な管轄とする丸の内警察署は、キャリア組（いわゆる国家公務員一種試験採用者）が現場研修をする署として知られている。エリートコースに乗ると見込まれた者が配属されるトップ3の署なのだ。それからもうひとつ、重要な部署がここには存在した。

二十世紀初頭から研究が進められ、実用化も密かに始まっていた全身義体や電脳化した人間による犯罪の増加は警察にとって深刻な問題だった。そこで電脳・義体を専門に扱う部署を試験的に2033年に配置した。

その名も、刑事部捜査第十一課。現在全国に五か所（札幌、東京、大阪、名古屋、福岡）設立されていて、東京の十一課は丸の内署内に置かれているのだ。

大森の配属は、その第十一課だった。

首都圏、特に東京は義体化率が高く、それに伴った犯罪も多い。丸の内署の十一課は人手不足で、かなりの激務である、という噂を大森は既に耳にしていた。

激務、望むところだ。脳は疲れるが身体は疲れない。どこまでできるか試すには、この十一課は申し分ない部署と言える。

実のところ、大森は就職先を決めるにあたって、第二、第三候補として陸上自衛隊と特別救助隊（レスキュー隊）を考えていた。つまり彼女は義体の人間離れた身体能力を生かせる職場を探していたのだ。

大森は全身義体であるから、当然電腦化もしている。だが彼女の電腦に関する能力は決して高いものとはいえず、本人もそれを自覚していた。試験は的確に大森の能力を見抜き、適所に配属しようだ。彼女は今一度深呼吸すると、丸の内警察署の中へと入って行った。

捜査第十一課は七階にあった。しかし内部の部署案内にもそれは明記されていない。十一課は基本的に、所轄の依頼によって動く部署なので、一般人からの依頼は直接受けないからだ。

表向きには、存在しない部署——
事前にされた案内に従い、エレベーターで七階まで上がる。このフロアは十一課の占領ということだった。

エレベーターが上昇している間も、大森は緊張を鎮めようと努めていた。やがてエレベーター特有の浮遊感がじんわりと消えた後、中央から引き戸が開いた。

目の前の廊下に、一人の女性がこちらを向いて立っていた。

淡いグリーンのスカートスーツをまとい、茶色い髪はアップにされている。首と同じ色のファンデーションを顔に施し、口紅はベージュをつけていた。緑色のアイシャドウ、黒いマスカラ。

ファンデーションをつけているということは、この女性は全身義体ではないということになる。義体の肌は基本的に老朽化しないので、ファンデーションをつける必要はない。もともと、義体でも社会的礼儀として口紅やアイメイクはするし、面倒で最初から唇の色を赤色にするなど永久的なメイクをしてしまう人もいる。大森自身は、唇は普通の色なので口紅と、アイメイクはしている。

大森がエレベーターから出ると、その女性は言った。

「大森司さんね？」

見た目と声からして、私の母と同一年くらいだろうか、と大森は思った。

大森は現在二十五歳で、大森の母は今の大森と同じ年で大森を産んだ。

そして大森の予想は見事に当たっており、その女性は現在五十歳だった。「はい、本日より捜査第十一課に配属になりました。よろしくお願いたします」

大森が敬礼すると同時に、

「杉田香（すぎた かおり）、十一課課長です。正式な辞令は後程」と言うことややはり敬礼をした。杉田は課長と言ったが、階級で言うと警視正となる。

現在の大森はヒラもヒラ、一番下の巡査（係）である。まだ辞令は出していないが。

杉田は手を先に続く廊下の方へ示して大森を促し、二人は並んで歩きはじめた。ショートカットの大森とは違い、髪をアップにしている杉田は、首後ろの端子が見えている。カバーはしてあるのだが、境目で分かる。電腦化している証拠だ。

「実はね、あなたの面倒見てくれる男どもは今呑気にお昼を食べているのよ。申し訳ないのだけれど、少し待っててくれないかしら？」

『ども』ということとは、少なくとも二人以上はいることになる。

「分かりました」

「お昼は？」

「済ませました」

「そう、とりあえず貴方の席はちゃんとあるから、まずはそこへ案内するわね」

杉田は廊下の一番奥まで歩いて行った。途中「留置所」「尋問室」「防電室」などのプレートがついている部屋が続いている。

一番奥の部屋のプレートは「捜査第十一課」となっていて、入口のドアは擦りガラスになっている。丸の内署全体にいえることだが、この建物はなかなかモダンな内装をしていた。外側はかなり老朽化していたが：

ドアの右側の壁に、指紋認証のパッドと、万一指紋を認識しなかった場合に用いる電腦用端子がついていた。杉田はそこに人差し指を当てた。ピッ、という音と共に擦りガラスのドアがスムーズにかなりのスピードで開いた。中に入る杉田。

ドアが閉まりかけた時、杉田が慌てて

「貴方のはもう登録してあるから、試してみても！」
 と言った。ドアは閉まる時の最後の方はスピードが遅くなるようになっていた。

大森は先程杉田が当たったのと同じ場所にマニキュアもしていない人差し指を当てた。

ピツ、と音がしてドアが開いた。

「よかったわ。こっちよ」

大森は一步入ると中を一瞥した。

机が全部で四つ、顔を見合わせられるように置かれていて、奥には誕生日席の机がある。合計五つ。誕生日席となるところの机には何も置かれていない。残りの席には投影機（ヴァーチャルキーボード、マウス、モニタを映し出す機械）の他に文房具などが置かれている。

部屋自体はカーペット敷きで、壁は白く、窓はない。

杉田は奥の誕生日席の隣に座った。

「あなたはそこよ」

杉田の指し示した場所は、丁度杉田の斜め前だった。入口に一番近い席ということになる。

大森は席まで行った。隣（左）の席は、書類やファイルや本が乱雑に載っている正直汚い。どんな人が使っているんだろう、と思いつながら大森は自分の椅子に腰かけ、カバンを机の中側の床に置いた。

対し、大森の真正面の席は綺麗に整頓されており、小さな鼠が入ったケージが置かれていた。投影機とそれしか置かれていないせいとか、とても殺風景に見える。

「かわいいですね」

「その机の目のペットよ。出したら逃げちゃうから、見るだけにしておね」
 大森はケージに指をあててみた。鼠が興味津々で指の匂いを嗅ぎに来る。それにしても動物持ち込み可とは珍しい職場だ。

「見ての通り、ここにはあなたを入れても四人しか要員がいないの。その席（誕生日席）は一応署長のものだから、普段は誰もいないし。寂しいかもしれないけれど、若い女性が来てくれたから華やぐわ」

大森は杉田の方を見て愛想笑いを浮かべた。杉田だっているのだから、男女半々だ。そんなに今まで女つ気がなかったのだろうか、と大森は杉田がどんな人なのか少し不安を感じた。

そして「激務」の理由がもう大森には分かってしまった。

この捜査第十一課の東京拠点、北は青森から、南は神奈川県まで（東北・関東地方）全域をカバーするのだ。

「それを四人で？ 気が遠くなるような話だ。」

事前の説明によれば、先にも述べた通り、基本的に所轄からの依頼で動くということだったから、軽犯罪であれば所轄にそのままやらせてしまおうだろう。しかしどの程度の規模からここが動き出すのかは、大森はよく知らない。故に、不安だった。

とはいえ、仕事なのだからやるしかない。願わくば、どちらかという

と荒っぽい仕事に来ることを。

「あ、先に署長に挨拶と辞令を受け取りに行きましょう。その方がいいわ」

突然杉田が言うので、

「あ、はい」

と大森は席を立って、杉田について部屋を出る。

「友達入室・退出はしないでね」

先に杉田が部屋を出る。ドアが閉まり、大森は一人部屋に取り残された。

「！」
 指紋認証に指を当てようとした瞬間、背後で何か気配がし、大森は振り向いた。

「が、そこには誰もいない。がらんとした、モダンで殺風景な部屋があるだけだ。」

確かに人の気配がしたのに。

腑に落ちない顔のまま、大森は指紋認証に指を当てた。

ピツ、と先程と何も変わらない音が鳴った。これから先、何回この音を聞くことになるのだろうか。

階段で下の階に行き、丁度上の階で十一課があった場所に署長室があった。

この扉は、木製の重厚なものになっている。モダンな建物に、ここだけが浮いている気がする。

杉田がノックする。

「入りたまえ」

中から張りのある男の声が聞こえた。

ここも杉田について大森は中に入って行った。

部屋の奥、中央の大きな机についていた男が立ち上がり、こちらを向いた。二メートルはあるうかという身長に、がつちりとした体躯。よくこのサイズの制服があったな、と大森は思ったくらいだった。帽子を被っていないので、髪型もはっきりと分かった。簡単に言えば、髪がない。

「やあ、期待の新人だね」

「大森司です。よろしくお願ひいたします」

言うと同時に大森は一礼した。

「川崎一（かわさき はじめ）だ。こちらこそ、よろしく」

川崎は机（こちら木製の重厚なものだった）の上に置いてある木製のトレイから、一枚の紙を取り出した。そしてそれを両手で持って大森の目の前に来た。

「大森司殿」

言われて、大森は思わず気をつけの姿勢を取っていた。

「警視庁丸の内警察署、刑事部捜査第十一課、巡査に任命する」

川崎から紙を受け取り、紙の両端をくっつけて軽く折り曲げ、右手に持ち、下す。

左手を持ち上げ、敬礼する。

「排命致します」

川崎も同様に敬礼し、これで大森は丸の内署所属の刑事となったのだった。

川崎は机の裏に回りこんで、再び椅子に腰かけた。

「実技試験の結果も素晴らしいものだったと聞いているよ。期待しているからね」

「ありがとうございます。：頑張ります」

署長直々に言われるのは嬉しかったが、それは同時にプレッシャーでもあった。

手にした紙を開いて見ると、先程川崎が言ったことと同じことが印刷されていた。

「ところで杉田君。追加人員のことだが、しばらくは無理だな」

少し離れたところに立っていた杉田はがらりと顔色を変えた。大森はそ

の変わり様に驚いた。今まであんなに穏やかだったのに。

「これだけ事件が多いにも関わらずですか？」

ハッキリとした物言いをする杉田に、思わず大森は驚いた。この部屋にはいない方がいいのかもしれない、とも思った。

「適任者を選びただけでも一苦労だ。それからその離職のための引き継ぎ等々、そう簡単にはいかんよ。大森君を獲得できただけでも運がよかったのだから」

自分がここに配属された裏にはいろいろな物語があったらしいことを悟り、大森はいよいよ気が引き締まる思いだった。どうしても欲しいと期待されれば、こちらだってそれに応えたい。

「では対応案としての、所轄の全身義体者及び高電腦技術者のリストは頂けるのですよね？」

「いわゆる『協力者リスト』だね。それは揃うよ」

「せいぜい所轄には借りを作って早いところ、人員を確保するようにしたいと思っています」

「とはいってもなあ。できたばかりの部署だし、札幌も、大阪も、名古屋も、福岡も似たようなものだぞ？」

「都内は義体化率も高く、現実、義体での犯罪は増加しています。所轄が抑えきれないケースも増えています。事態は一刻を争うと思います」

この丸の内署の中で一番の権力者に、これだけハッキリと意見を述べられる杉田はすごいと大森は思った。この人の下については、正解かもしれない。

川崎はどこかばつが悪そうに椅子をくるりと動かしてから

「まあ、確かに」

と、事実だけは認めた。

「どうか、ご考慮を」

「分かった。メーカーからも人が抜けないかも検討してみよう。スーパーバイザーとしてね」

再び杉田の顔が曇ったが、川崎は見ないようにしていた。

それはどこの職場でも、有能な人材は欲しいだろう。しかしその有能な人材の数は限られている。無能な人材もいかにうまく使うか、有能な人材をいかに揃えるかは上司の悩みどころのひとつなのだろう。

大森は、個人的には自分が有能な方にカテゴライズされていることに、小躍りしたい気分だった。

— 二 義足の男 —

細い路地を、二人の男が歩いてくる。「もりそば男」と「全身義体男」のコンビだ。

「うあー」

もりそば男が大きな伸びをした。頭も左右に傾けて四十肩をほぐしてみようと試みたが、無駄なことだった。

背後から全身義体男が言った。

「少し時間押してますね」

「早くいかねーと杉田かーちゃんがるせーな」

この二人こそ、先程杉田が大森に言った「あなたの面倒を見てくれる男ども」だったのだ。

ロマンスグレーとは程遠い、背の低いよれよれ背広が品川考（しながわ たかし）。警部補で、辞書によれば「初老」と呼ばれる年代にもかかわらず、独身。全身生身で、電脳化すらしていない。

身体に仕込まれた端子にケーブルを挿すか、無線を用いて容易にネットに接続できるようになる「電脳」は、その利便性の高さからかなりの割合でこの国でも浸透している。子供ならばともかく、品川のような大人で電脳化していない、というのは二十一世紀初頭ですっかり浸透し、電脳によって滅びつつある「携帯電話を持っていない」と同じようなことだ。

一方イギリス風青年は野比将（のび まさる）。品川とはコンビを組んで三年目の巡査。全身義体にも関わらず眼鏡をかけているのは、本人の趣味のようだ。だから当然、眼鏡に度も入っていない。二十代後半の、いわゆるアラサーだがやはりこちらも独身。

路地を抜けて、広い道路の歩道に出た。今日は本当にいい天気で、太陽の光がほぼ真上から降り注いでいる。品川は思わず空を仰いだ。温かい。

「ドロボー！」

突然、右の方から女性の叫び声が出た。

職業柄、素早く右の方を見た品川と野比は、黒っぽい服を着た男が走ってくるのを見つけていた。手に女性もののハンドバッグをわしづかみにしている。

品川は背後の野比に手で触れた。「手を出すな」という意味だ。男は人を押しのけて物凄い勢いで走ってくる。品川と野比の目の前まで来た。

実に絶妙なタイミングで、品川が決して長いとはいえない脚を差し出した。黒っぽい服を着た男の足首が、見事にそこに引っかかった。

男は前のめりになり、そのまま地面に倒れる。かと思いきや、引っかかった方の脚を物凄い勢いで後ろに振り上げ、その勢いで身体ごと空中で一回転した。着地し、何事もなかったかのように走り始める。

「な！」

絶対にうまくいくと思っていたヨミが外れて、品川は思わず声を上げた。男が着地した時点で、野比が走り出していった。

後から息を切らせ気味の女性が走ってきて、叫んだ。

「誰か！ つかまえて！ そいつひったくりです！」

品川も走り出した。黒っぽい服の引ったくり、野比、品川、女性の順に走っているが、何と品川が野比を追い抜いた。だがそれはほんの数秒の話で、みるみるペースダウンして野比に抜かれざま

「後、頼んだ」と言うと、品川は歩き出してげえげえと息を整え始めた。黒っぽい服の男は追いかけてきている人間がいることに気付くと、ピルの角を左に曲がった。野比も素早く反応してついていく。

曲がった先は何もない空き地、というか建築現場になっていて、少ない建築資材が置いてあるのみの場所だった。「観念しろ。警察だ」

野比が言ったが、黒っぽい服の男は野比の方を見ようとせず、隣のビルをしきりに見上げている。やっと品川が追いついてきて、野比と男を発見すると

「おい！」

と言った。男はその声に振り向き、二人いることに気付くと、両足を曲げて和式トイレを使用する時のようにししゃがみこんだ。

次の瞬間、バシユッ！ という音と共に男の身体が物凄いスピードで

空に向かって飛んで行った。

「野郎！」

品川は素早く左脇の下のホルスターからキンバー・カスタムCDP IIを取り出すと、二発発砲した。パンパン！と乾いた音がし、男の脚の膝下辺りに二発とも命中した。貫通した弾が、義足の部品と思われる何か小さいものが空中にばらばらと放り出された。

男の身体は、ビルの屋上辺りに達していた。飛び移られる！と品川も野比も思ったが、男がビルのへりに脚をかけた途端、がくと脚があらえない方向に曲がって踏み外した。

男は空の方を向いたまま、地面に向かって落下して行く。

野比は急いでその落下地点と推測される場所に行き、脚を大きめに開いて手を構えて備えた。来るぞ：

男の身体が野比の手の中に落ちた。物凄いGがかかるが、野比は踏ん張って、それでも腕は地面すれすれのところにあった。

野比は曲げていた腰を伸ばし、男を持ち上げてお姫様抱っこした。

「警告もなしに、いきなり（発砲）すか？」

野比の言葉には非難と、あと少々の怒りが詰まっていた。

「義体部分だ」

野比は男の足を地面に下ろし、男の腕を取り、自分の肩にはわせた。

「ホラ、歩いてください」

「うううう：」

男はびっこを引きつつ歩く。

「義体部分だったからよかったものの、生身の脚だったらどうするんですか」

野比の非難はまだ続いていた。

「その場合は撃たねえよ。生身の人間の脚力で、あんなビルの屋上に飛び移るようなジャンプなんてできるわけないだろ。アタマ使えよ」

品川の言うことは正論だった。空中を飛んでいる者に「動くな！ できないと発砲する！」などと警告しても意味がないことだし、義体部分なのだから死ぬこともない。

品川が発砲した弾は義体用のものだったため、強力だ。脚の命中した部分からは機械部品が飛び出ている。

品川は銃を背広の内側のホルスターにしまうと、地面に落ちていた女

性のハンドバッグを拾ってきた。周囲を見渡したが、飛び出た中身はないようだ。丁度女性がやってきて、道のところから工事現場を見ていた。

品川は左耳の中央部分を二回叩いて

『丸の内P2から警視庁へ。ひったくりの現行犯逮捕。マルガイ（被害者）・ホシ（犯人）搬送のためPC（パトカー）手配願います』

と言った。品川は左耳に無線送信機兼イヤホンを入れていて、無線のやりとりはそれで行う。

ややあって、女性の声で

『警視庁から丸の内P2へ。位置を確認致しました。手配します』と返答があった。野比は電腦化しているので勿論無線の音は拾える。今の女性の返答も、勿論聞こえている。

『丸の内P2から警視庁へ、了解』

品川は女性に歩み寄り、バッグを手渡した。
「なくなっているものはありませんか？」

女性は中をごそごそ探り出した。

どうせパトカーはすぐ来るのだが、品川は背広の左ポケットから煙草の箱を取り出すと一本くわえた。

『路上喫煙禁止区域ですよ』

野比に指摘され、品川は工事現場に一步入った。五百円ライターで火をつける。吸いこんで、吐きだす。

この瞬間がたまらない。一仕事終えた後の一服だ。

ふと周囲を見渡すと、地面は吸殻だらけだった。この近所に勤めるサラリーマンの、知られざる喫煙所と化しているらしい。それにしても痕跡を残すとは。こどもそのうち誰も入れないよう閉鎖されてしまうことだろう。

「大丈夫みたいです」

女性が答えたと思ったら、背後の車道にパトカーが来ていた。

野比はやっとこの肩を貸しているホシから解放されるかと、先にパトカーの方へ歩いて行った。重たいのが嫌なのではなく、男と密着しているのが嫌なのだ。

野比は全身義体のくせに、若干潔癖症気味なところがあった。

煙草が名残惜しい品川はまだ工事現場にいた。

『丸の内P1より丸の内P2へ。引ったくりの現行犯逮捕ですって？』
杉田から品川への無線だった。

『丸ノ内P2から丸ノ内P1へ。そうですね』
短く答えると、煙草の先が赤く光る。

『それは、あなたがすべきガサ（捜査）なの？』

『見逃せと？ 目の前で犯罪が起こっている、正にその時に？ まあそ

れ以前にホシは部分義体者ですから、十分管轄内ですよ』

杉田からの返答はない。品川も何も言わない。
品川は地面に落ちていた薬莢を二個拾い上げ、背広のポケットに入れた。

『これから戻りますよ。新人のことは忘れていません。丁度調書を取るいいカモが手に入りました』

『丸ノ内P1了解。待ってるわ』

品川は最後の煙を吐き出すと、携帯灰皿を取り出して吸殻を入れた。それをさらに背広のポケットにしまい、ズボンのポケットに両手を突っ込んで、パトカーの方へと歩いて行った。

パトカーには、助手席にマルガイの女性、後部座席にホシをはさんで右に野比、左に品川が座っていた。運転しているのは所轄の警官だ。

「こうなってしまった以上、数時間お付き合いいただくことになってしまえますが構いませんか？」

品川が問うと女性は顔を後部座席に向けて

「結構です。今日の用事はとりあえず終わりましたから」と答えた。

「署はすぐそこですから。車で行くのが馬鹿馬鹿しいくらいに」と品川は言い添えた。

指紋認証のピツ、という音が聞こえ十一課に品川が入ってきた。思わず大森は背後を振り返った。

杉田はそちらを見ようとせず、机上に映し出されているモニターに見入っている。

「お、新人か」

品川は大森の左の汚い机の前に立ち、上着を椅子にかけながら大森に声をかけた。脇の下のホルスターにはちら見したところガバメントが収まっていた。四十五口径を使う刑事は珍しい。

大森は立ち上がって

「大森司といいます。至らない点もありますが、よろしくお願い致します」

と緊張しながら言った。

「おう、期待してっぞ。スゲー強いんだってな」

「いや、そんな…」

「おじさん。貴方は誰なのか教えて差し上げては？」

杉田がとげとげしい声で会話に割って入ってきた。品川は内心「自分だってババアだろ」と思いつつながら大森に向かって言った。

「品川孝だ。よろしくな！」

「はい、よろしくお願ひします」

気さくそうな品川に、大森は幾分かほっとした。警察組織という、何だか怖そうな人が一杯いるところ：というイメージがあったからだ。そしてこの机の状況から、品川の性格もなんとなくわかったよう気がした。

「野比君は？」

「ホシの取り調べの準備してます」

「マルガイとの何らかの関連性が認められないのならば、マルガイは早く帰してあげて」

「まあ、ないと思いますけどねえ。ひったくりだし。所持金だって五千円しかなかったそうですよ」

「そう」

先程の大森と品川の無線は、勿論大森にも聞こえていた。だからなんとなくギクシヤクしている二人のことは分かっていた。なるべく今の杉田には、余計なことを言わない方がいいかもしれない。

「じゃ、行くか」

「あ、はい」

大森が机の脚入れのところに置いたカバンからメモ帳を取り出そうとしていると、

「電脳化してるんだろ？ 身一つでいいんだよ」

と品川が自分を通り越しざまに言った。

「あ、はい」

大森は椅子を机に収めると、慌てて品川について行った。

他には誰もいなかった十一課の部屋で、ふう、と杉田は溜息をついた。

すると杉田の眼前に丸いウインドウが開き、プルルル、と音がした。無線ではなく通常回線を用いた電話だ。

ウインドウには「メガテク 鮫洲」と出ている。

杉田は先程よりもさらに大きな音で溜息をついた。着信音が止まり、ウインドウに男の顔が映し出された。

「丸の内警察署捜査第十一課、杉田です」

「お世話になっております。メガテクボディー・インダストリアルは鮫洲でございます」

「お世話になっております。杉田です。どうされましたか？」

「ひったくりを現行犯で捕まえたと聞きましてね。義足だそうですね？」

「ええ、相変わらずお早いですわね」

この鮫洲という男は、大手義体メーカーのひとつである外資系のメガテクボディー・インダストリアル社の営業部に所属する営業マンだった。もっぱら警察を相手にしており、売り込みを行っているが、実は他の目的が真の仕事だった。

「弊社の製品だったんでしょかね？」

「少々お待ちいただけます？」

すると鮫洲のウインドウが灰色になった。杉田は無線で野比に呼び掛けた。

『丸の内P1から丸の内P3へ。野比君、ホシの義足はどこ製の？』

『丸の内P3から丸の内P1へ。ウチのです』

『あ、そう。分かったわ。ありがとう』

ウインドウが再び明るくなり、アクティブとなった。

「NOB社製だそうですね。鮫洲さんの出番はないようですね」

「そうですね。安心しました。お手数をおかけ致しました。失礼致します」

ウインドウが閉じ、電話が切れた。

鮫洲は警察無線を傍受していて、自社の製品絡みの犯罪が起こると飛んでくる。そして自社の欠陥ではなかったかなどを検証するのだ。さすが法律の国、アメリカから生まれた企業だけあってやるのがいかにもアメリカ流である。

丸ノ内署の入口には、密かにセンサーがつけられていた。主に金属と爆発物探知、加えてX線スキャンである。勿論、義体化しているかどうかもこれで分かる。

だが唯一、このセンサーにかけても生身なのか義体なのかはつきりしない人物が丸ノ内署には頻繁に出入りしていた。

杉田との通話を終えた鮫洲は、丸ノ内警察署の前にいた。中に入り、受付の女性警官に向けて言った。

「メガテクボディー・インダストリアル第三営業統括部の鮫洲典和です。署長様と面会のアポイントを取っているのですが」

「鮫洲様ですね。少々お待ちください」

受付の巡査はキーボードを操作し、アポイントメント一覧の中から鮫洲の名前を見つけ出した。そして指紋認証用のパッドを受け付けの台の上に置いた。モニタには、入ってきた時のスキャン画像が出ているが、ぼんやりと身体の輪郭が出ているだけで骨すらも見えない。

「人差し指を当ててください」

言われるままに人差し指を当てる鮫洲。ピッ、という音が鳴った。

「結構です。直接お上がりください」

「ありがとうございます」

鮫洲はエレベーターに乗り、署長室に向かった。鮫洲の本当の目的は、これから行うことだった。

川崎は、机に座って鮫洲が提示した資料に目を通していた。

「これはいわば、緊急停止スイッチのようなものということかね？」

「そうですね」

「それはいい機能だ」

鮫洲は、そこで川崎の方に大きく詰め寄った。

「今月分を見せていただきたいのですが」

声が異様に小さい。川崎は黙って、鮫洲を手招きした。鮫洲は黙って、川崎の座っている椅子の隣まで行く。

「これだ」

川崎の席上に映し出されたモニタには、円グラフが表示されている。文章のタイトルは「メーカー別事件件数」となっている。鮫洲は食い入るように見つめた。

「弊社のパーセンテージを、四十九に」

「先月も同じ数値だ。いくらなんでも怪しまれる」

「では五十に」

「無理だ。六十までなら譲歩する」

「緊急に義体を停止させられるんですよ。これを使えば、電腦化さえしていれば、普通の警官だって止められるようになるんですよ」

川崎は、モニタを見ながら腕組みをする。相変わらず、狡猾な男だ。

「六十までだ。これ以上は本当に無理だ」

鮫洲は横目で川崎のことをじろり、と睨んだが

「了解しました。これからもよろしくお願い致します」

と、何でも無い普通の口調で言った。

「そっちこそ、役立つ情報を頼むよ」

「勿論です。失礼致します」

鮫洲が出て行くと、川崎は溜息をついた。

野比が所属するので、NOBの義体に関してはある程度の情報は入ってくる。川崎自身も、NOBの義体だ。だがメガテクに関しては直接のコネはない。そこで鮫洲から情報を得る代わりに、メガテクの義体が起こした犯罪件数を間引きしているのだ。勿論違法にして重罪だが、半年毎にモデルチェンジを繰り返す義体の業界に対応して行くには、致し方ない選択肢だった。

品川と大森は、同じフロアの「尋問室1」という部屋に入った。部屋は広いが、マジックミラーなどはない。片側からしか見えないマジックウォールを使用しているからだ。

部屋の中央に机と向かい合わせに椅子が一脚ずつあり、手前の椅子にホシが座っていた。

ホシは首後ろの有線端子に、小さい機械を取り付けられていた。そのせいか、目を閉じて、微動だにしない。これは（催眠）ターミネーターといって、一時的に取りつけた者を強制的に催眠状態にする機械だった。また、同時に無線を妨害する機能も備えており、これを取り付けられた者は有線でも無線でもネットに接続することができなくなる。

「来たぞ。期待の新人だ」

ホシの足元にしゃがみこんでいた、細身のスーツを着た男が顔だけ振

り返った。

眼鏡をかけているが、全身義体者だ。大森はだいたい、瞬きをするかしないかで見分けるようにしていた。

「大森司といいます。至らない点もありますが、よろしくお願い致します」

大森が頭を下げている間に

「それさっきも言ってたね。野比将です。よろしく」

という、イヤミとそっけない自己紹介が聞こえた。大森は頭を上げると野比を見た。既に銃弾により開いたズボンの穴からホシの脚を見ている。

「何してんだ？」

品川がいぶかしげに野比に訪ねた。

「型番をね：あった。NOBK-01127、キデイシリーズか：」

「元々は怪我をした子供向けのモデルですね。サイズは自由に変えられますから、大人にも換装はできるんですが」

大森は随分詳しいいな、と思いつながら聞いていた。

「俺はさっき、ひざ裏を狙ったが最も効果的な場所は？」

「俺が知るわけないでしょ」

「お前ん家で作った義足だろ？」

「：俺が設計したわけじゃないですよ」

不機嫌に野比が返すと、次の瞬間大森が

「あー！」

と言って野比を指差した。

品川と野比は顔を見合わせた。そして品川が言った。

「今頃気付いたのか？」

「NOB社：野比将って、あの野比さんなんですか!？」

「あの、つてどのさ？」

野比は分かっているくせに、わざと意地悪なことを言う。

「だから、野比エンジニアリングからNOBに社名変更した会社の一族の人ってことなんですか!？」

品川は野比のところをやってくる、しゃがんだままの野比の頭の手を置いた。

「野比将。NOB社長の野比勝一郎の息子だ」

「…やっぱり：刑事だなんて話、聞いたことないですよ」
 「世間的には会社員ってことになってるからな。まあ団体職員と思えばおんなじようなモンだ」

二人が会話をしている間、野比はホシの脚の傷の様子を見ていた。自分が話題になっていることは気づいている筈なのに、まるで興味がないようである。

野比は立ち上がると、大森に向かって言った。

「水、持ってきてくれる？ ホシ用の」

「あ、はい」

大森は尋問室1を出たが、どこに給湯室があるのだろうか。誰にするか考えた末、

『丸ノ内P4から丸ノ内P2へ。応答願います』

『丸ノ内P2、品川。秘匿回線なんて、大森、どした？』

秘匿回線とはピアツーピア、ようするに他人が聞くことができない無線のことだ。つまり同じ部屋にいる野比は品川の声しか聞こえていないことになる。

『あの、給湯室ってどこですか？ 野比さんに言われた…』

『あー、水か。それは下に降りないと駄目だ。六階に行け。誰でもいいから聞けば教えてくれるよ。ついでに顔も売って来い』

『了解』

野比が、そこにやり、と笑った。

下の六階は刑事組織犯罪対策課だった。暴力団や銃器・薬物対策や国際犯罪対策を担当する部署である。場所柄、要人なども訪れることの多い丸の内署では欠かせない部署ともいえる。

大森の顔はあつという間に署中に伝わっていたらしく、六階に行った途端、物凄い歓待を受けた。

波いる男どもを押しつけて、たくましい女性の巡査が給湯室の場所を教えてくれた。透明のプラスチックの使い捨てコップを用いる。尋問や取り調べでは、何が起るか分からないからだ。

やつのことで水を七階の尋問室1に持ってこれた。大森の顔を見た途端、野比がくつくつくと笑った。

「何がおかしいんですか！」

「勝手に彼氏いないことにしちゃったけど、いいよね？」
 情報を流していたのは野比だったのだ。彼氏いないって、他にどんな情報を流したのだ!? スリーサイズとかか!?

「個人情報漏えいじゃないですか、それって！」

「嘘だもの。いいじゃないか」

嘘だ?! いいわけがない!!

真面目そうな外見にすっかり騙された、と大森は思った。まあいい。結果は仕事で出せばいいのだから。見てくれている人は見てくれているにしても、この野比という先輩はいけ好かない。

だいたい、大企業の御曹司が、警察官!? 暇潰しでもしたいのだろうか。大森は段々腹が立ってきた。だが気を静めるために、ゆっくりと部屋の中を歩きはじめた。

「なあんだ」

つまらなそうに品川が言った。

「何がです？」

野比が聞く。

「全身義体者同士のガチバトルが見られるかと思ったのに」

そういうえば、野比の義体はこの何という型番なのだろうか。NOB社製であることは確かだろう。きつと高級モデルに違いない。

大森自身は、メガテクボデイの「ムーン」シリーズだった。これは通常の警官などに採用されている量産型「クルースン」シリーズの上をいくもので、個人ではまず購入しないモデルだ。この職業に就くために、親に頼みこんで買ってもらったものだ。

実際ガチで闘ったらどうなるだろうか。やはり性能差で負けてしまうような気がする。

ところが野比はあつさりと言った。

「そんなの、俺が負けるに決まってるじゃないですか。品川さんにも勝てないのに」

「銃がなきや、分らんぞ」

先程の噂を流した早さ、そして今の発言から察するに、野比は肉弾戦よりも電脳戦を得意とするようだ。だから何度も「期待している」と言われたわけか。

品川は寄りかかっていた壁から背中を離すと「さて、始めっか」

と言った。同時に、野比がターミネーターを外した。

大森は、すっかり日も落ちて暗くなった丸の内署の一階入り口にいた。マルガイの女性を帰すためである。

「本当に、パトカーで送らなくてもいいですか？」

「大丈夫です、日比谷から地下鉄に乗りますから」

「あの、ひったくりを防ぐのは難しいですけど、できるだけ身体の中央に持っていれば結構効果的ですよ」

「ありがとうございます。お世話になりました」

マルガイの女性は一礼すると、駅に向かって歩いて行った。

マルガイの女性が解放されたのは、ホシとの関連性がないことが裏付けられたからではなかった。

『カンモクですよ』

品川は無線で状況説明を行っていた。カンモクとは、完全黙秘の略だ。

『あれから：結構経つのね、五時間!?!』

さすがに杉田も驚いている。品川は取り調べでオトすことにかけては一流の腕を持っていた。情報収集が得意な野比と組んでいるせいもあるが、このホシはネットで調査をしても何も見つからないと野比は言った。

『杉田さん：札取ってくださいよう』

品川が言っている札とは令状のことで、この場合はホシの電腦に侵入する「電腦侵入令状」を指している。

『了解。五分待って』

杉田の返事に、三人とも、ハア、と溜息をついた。

第二話「ピアノ・レッスン」

一 義体自由運動

丸ノ内署捜査第十一課は、丁度お昼の時間をむかえていた。

野比は自分では何も食わず、ケージの中のスナネズミに餌をあげている。左手首の端子収納からはケーブルが伸びて机の穴を通して机下に置かれている端末に繋がっている。きつとネットで何かしながらの餌やりなのだろう。

品川は机の上で、通勤途中にダウンロード販売で買ってきた新聞を電子パッドで読みながらコンビニのおにぎりを食べていた。

大森はタウン雑誌を電子パッドで読みながら、自前の水筒から何かを注いで飲んでいる。左の品川を見ると、聞いた。

「何おにぎりなんですか？」

「こんぶ！」

まるで小学生のように元気に答える。

「杉田さんがいないからって、フリーダムすぎませんか？」

「昼休みくらい勘弁してくれや」

という品川は、コンビニの袋から蕎麦を取り出した。

「まだ食べるんですか？」

大森は半ばあきれて言った。

「一日一回蕎麦食わないとダメなんだよ俺」

いそいそと包装を解く品川を、ため息混じりに大森は見つめた。この部署に来てから一ヶ月くらい経つが、品川の性格は未だによく理解できないでいた。

「こういう時全身義体でよかったなあと思うんですよ俺俺」

急に野比が言った。

「一日三食食わずに済むからか？ 義体だって食べないとダメはダメだろ」

「ええ。でもずっと合理的ですからね。まあ生身と同じように凝ることだってできますけど、俺は錠剤派ですから」

野比はそう言うと、スナネズミに餌を上げ終わってケージを閉めた。

「でも不思議なもので、人や動物が食べている姿を見るのは結構楽しいんですよね」

意外な意見に品川は思わず野比の方を見た。

「私は今日はこれ（水筒を指した）ですけど、普通の食事みたいなものを食べるのもスキですよ。話題のお店に行ったりもしますし」

「全身義体もいろいろだな。義体用の店探すのはまだまだ大変だろう」品川はそばの麺をほぐすための液体を容器の中に開けていた。慣れたものである。

「んー、でもやっぱりお金持ちが多いせいか高いお店が多いかなあ……」

「ケツ：面白くねえな」

品川はやつと蕎麦つゆを専用の丸い容器に開けると、割り箸を割って蕎麦をすくい、蕎麦つゆに途中くらいまでつけると口に運んだ。蕎麦をすすする音が十一課に響く。

「でも事実は事実ですよ。俺はともかく、大森さんは公務員の給料でよくその義体を維持できてると思いますよ」

その野比の言葉を聞いて、品川はまだ口中にそばが残っているにも関わらず

「何だお前、知らないのか？」

と言った。

「行儀悪いなあ。何がですか？」

野比はあからさまに顔をしかめた。

「全身でも部分でも義体の場合、申請すれば補助金が下りるんだぞ。俺たちの稼業は」

「え!? そんな制度あったんですか？ 聞いたこともない」

「：お前には誰もそんな制度必要だとは思わないだろ：NOBの試作品を換装してんだからよ。どうせお前自身は一銭も払ってないだろ？ だったら申請したところで何も出やしねえよ」

と言うと品川は再び蕎麦をすすする。

「でもなんか損した気分……」

「大金持ちの息子のくせに、せこい奴だな」

「金持ちなのは親父であって、俺じゃないですよ」

「そうはいっても、普通の中流家庭とは違う生活を送ってきてるだろ」

野比はいい加減品川の相手が疲れたので、真正面にいる大森に話しかけた。

「そういえば大森さんはいつ全身義体化したの？」

品川は

「おい、シカトかよ」と絡んできたが、野比は答えない。

大森はしばらく視線を上によってから、「高校生の時ですから、七、八年前くらいですね」と言った。大森が曖昧に答えたのは、義体を換装した直後なのか、リハビリが終わって普通の生活が送れるようになった頃なのか分からなかったからだ。生身から最初の義体へのリハビリは、だいたい一年くらいかかってしまう。

今大森が行ったような、「目を泳がせる」など本人が無意識に行う行動を全身義体がやるのは、生身の頃の癖が残っているからだ。大森より遥かに若い時に全身義体化した野比は、「無意識に」何かすることはほとんどないに近かった。

こういった「人間味」の残っていない全身義体者のことを「ハーフロボット」と言って揶揄する風潮があった。早々に親から貰った身体を捨ててしまった者を責め立てる意味合いもある。ちなみにキリスト教圏の欧米から生まれた言葉である。

「へえ」

野比は理由を聞きかかったが、何だかバンドラの箱を開けてしまいそうな気がしてやめた。

大森の目に侵入して見た、彼女の上半身。それは明らかに「そうするために」義体化したことを示している。胸を自らなくす事情など、いい理由であるわけがない。

そんな野比の思惑も露知らず、大森は呑気に言う。

「杉田さん、遅いですねえ。会議はもうとつくに終わっているはずなのに」

野比は改めて大森の上半身を見た。胸は普通の女性のようにふくらんでいる。パットか何かを入れているのだろう。でないと、着る服全てをオーダーメイドにしなければいけない。あるいは、男ものを着るしかなくなってしまふ。

「延びるのが会議の常だからな。いくらハイテクが進んでも、やってるのが人間である以上はな」

すると、ピツと音がして杉田が機嫌悪そうに入ってきた。品川の「お疲れ様です」

というねぎらいの言葉にも答えず、乱暴に書類を机に置くとため息をつ

いて机に座った。会議で余程何かあったとみえる。ちよつとツリ目型の老眼鏡をかけていることも手伝って、非常に不機嫌そうに見えた。

品川が野比の方を見ると、野比も同じような深刻な表情をしていた。「大森さん」

杉田は書類を机に放ったことでフラストレーションを少しは解消させたらしく、普通に言った。

「は、はい」

「大変申し訳ないのだけれど、明日、所轄の支援に行ってもらわ」

「明日」という単語に品川はすぐにそれが何であるか分かった。

「まさか」

杉田は苦虫をかみしめるような表情をした。

「お察しの通り、義体自由運動のデモの監視よ」

義体自由運動のことを説明するためには、この国の義体の歴史を説明する必要がある。

NOB社が国内で始めて部分義体の製品化に成功し、同時に、海外からもメーカーが参入してきた。この国のシェアを二分するのは野比の父が経営するNOBと外資系のメガテクボディンダストリアルだが、それ以外にも大手家電メーカーなども一部ではあるが義体を生産している。

部分義体は、障害を持つ人達を健常者、いや、それ以上の能力を持つものに変身させることができた。メーカーの競争は熾烈を極め、半년도に新しいモデルが登場し、義体の技術は革新していった。その結果、義体であれば人間の数倍の仕事をこなすことも可能になる者も多く出始めた。

機械化が多くの労働者を路頭に迷わせたように、義体の普及は生身の身体を持つ人間の職を奪う結果となった。特に製造業に関して顕著で、生身の一般労働者の失業が社会問題化した。

そこで政府は製造業に限ってひとつの法律を制定した。ひとつの事業所に雇える義体者の人数を制限するというものだ。

勿論反対運動は起こった。だが法律は施行され、その反対運動である「義体自由運動」は同じ名を持つNGOを中心に現在も活動を続けている。そして明日は、その「義体自由運動」がデモ行進を行う予定なのだ。

杉田はかけていた眼鏡を外し、目頭を押さえた。

「何で所轄の仕事に行かなきゃいけないんですか。全身義体だからって所轄にもうじやうじやいるでしょ。それに、資料読みましたけど、東亜製作所のアンドロイドも出張ってくるらしいじゃないですか」

「東亜製作所が!? …珍しい」

野比の驚きように、大森がおずおずと

「あの…東亜製作所って…?」

と聞いた。品川はそばを飲みこむと

「アンドロイドを専門に作る会社で、世界的にも評価されている。完全オーダーメイド製で、一般人が手に入れられる代物じゃない。…勿論、ガインイドもセクサロイドも作ってる」

と言った。それを聞いた大森は、急に苦い表情をした。野比はそれを見逃さなかつた。

気付いていない品川はおかまいなしに、蕎麦をすすする。

「ロボットの警備がいるなら、わざわざ出張ることないんじゃないんですか」

品川は再び蕎麦を飲みこむと、言った。

「アンドロイド・ガインイド、つまりロボットには全身義体と決定的に違うところがある。それは何だ? 大森」

「脳が違います。全身義体は人間の脳ですがアンドロイドの脳はAIです」

「それから?」

「…血が人工血液です」

「最後に?」

「…人間を殺せない」

これはいわゆる、二十世紀の生化学者であったアイザック・アシモフが提唱した「ロボット三原則(法)」のことである。

しかし今となつてはその法律も形骸化しており、ロボットが犯罪に利用されることは多かった。またロボット三原則法の罰則が比較的緩いことも、犯罪に拍車をかける理由になっており社会問題化している。

「その通り」

品川は椅子をくると正面の杉田に向けてと言った。

「全身義体でもうちの秘蔵っ子をやる理由はどこにもないと俺は思い

ますがね、杉田さん」

品川は言い終わると、蕎麦ちよこに入っている蕎麦つゆをそのまま一気に飲み干した。

「私も勿論突つばねようとしたわ。こんなのうちの仕事じゃない。でもね、大森さんをここに入れるに当たって貸しを作ったところがあつて。今回だけは、どうしても断れなかったのよ」

そう言われてしまえば、大森は命令に従うしかない。品川はコンビニで買ってきたおにぎりや蕎麦容器などの残骸を、再びコンビニの袋に戻しながら

「大森、適当にやれ、適当に」

と言った。

「そんなことしたら十一課の信用に関わります。真面目にやってもらわなきゃ」

杉田が言うべきことを、先回りして野比が言った。

大森は、左の品川と前の野比を交互に見て

「ちゃんとやりますよいつも通り」

と言った。

「大森さん」

杉田は眼前に広がっているモニタをコピーすると、片方を大森の方に手でスライドさせて放った。大森は掌でモニタを受け止め、自分の視界の前に持ってきた。

「明日の詳細はその共有フォルダに入っているから全て目を通しておいて頂戴」

「分かりました」

大森は視界に開いたウィンドウの中に入っているファイルをざっと確認した。

「義体を持つ労働者に自由を、っていうデモだから全身義体の者を監視にあたらせるのは分からないでもないですけど、案外逆にした方がうまくいくんじゃないでしょうか?」

「というと?」

「自分達が職を奪うことになる相手を見て、声高に叫べますか?」

「法に守られて職を得ている弱者を目の敵にするかも」

蚊帳の外の品川はまるで他人事のように

「なるほど。そりや怖いな」

と言った。

大森は、眼前のモニタを見つめ続けていた。

神奈川は、自宅のリビングで六十インチ大型3D液晶テレビでニュースを見ていた。それは丁度、明日の義体化自由運動について報道していた。

神奈川の妻がやってきて、紅茶のカップを机に置く。自分も向かいのソファに座る。

「高宏さん」

「……」

「……しばらく、仕事をお休みした方がいいんじゃないか？」

「……」

「根を詰めすぎてもよくないわ。リフレッシュした方がいいわよ」

「……」

「あなたが目指す音に到達できない苛立ちは分かるけど……まだ換装して三ヶ月しか経ってないじゃない。普通のリハビリですら半年から一年かかると言われたのに、あなたは今あんなことまでできるようになっているのよ。それだけでもすごいことだわ」

「……この人達は凄いな」

「え？」

神奈川の妻はそこで初めてテレビを見て夫が義体自由運動について語っていることに気付いた。

「俺は義体によって職を失うかもしれないというのに、自分達で職を取り戻そうと戦っている。この食欲さは尊敬に値するよ」

神奈川の妻が振り返ると、ニュースのテロップで「義体自由運動 明日開催」とあった。

義体自由運動は、芸術家に関してはあまり当てはまらない話だった。というのも、人間の生み出す「美」こそが評価されるのはこの星が生

まれた悠久の歴史から変わりない。身体を人間の何倍もの精密さや強力で動かす事のできる者の作った作品を理解する人間は少ない。そんなものは、「できて当たり前」だからだ。従って、芸術関係者には圧倒的に生身の人間が多かった。

神奈川はソファから立つと、リビングを出て行くとした。彼の妻は

「高宏さん、どちらへ？」

と聞いた。

「……菅野（すがの）に会ってくる」

ボタンとドアが閉まり、残された神奈川の妻は不安そうな表情を浮かべた。

神奈川は交通事故が原因で義体化したにも関わらず、義手になった事実の方がよほどショックだったらしく、今も車の運転は普通に行っていた。

神奈川が会いに行くと言っていた菅野は、車の信号待ち中に電話番号をしていた。菅野は神奈川の実力をいち早く見出し、長年コンビを組んでプロデューサーをしている男だ。

菅野だ。どうした。……。ああ。この前家で実際の演奏を聞いた……。確かに凡人とは思えない回復力だが、ピアノストとしてあれでは致命的だ。年末のコンサートもリスケか中止を考えざるを得ないだろう……。最初事故った時はもうダメかと思っただが……まさか義手になってピアノストを続けるとは……その情熱は買っただけでいいところなんだが……。あの神がかった演奏はもう、聴けないのかもしれないな……」

菅野の電話に再び着信が来た。発信元者を見て、車を路肩につけて菅野は電話に出た。

「神奈川さん、お疲れ様です。丁度よかったです。会ってお話したいと思っ

ていたんですよ。今ご自宅ですか？ ……え？ もう出てる？ ……俺も今出先なんです。夕留辺りにいるんですが……いらしていただけますか、すいません。じゃあこの前打ち合わせ行っただけの店でお待ちしていますよ。ええ、では失礼致します」

菅野は電話を切り、

「さあて、何と言ってくるかな」と独り言を言い、車を発進させた。

とあるビルのひと部屋にNGO団体、「義体自由運動」はあった。

オフィスのようなビルの一室に、一人の男が首にケーブルを繋ぎ端末に向かつて物凄い速度でタイピングをしていた。

そこへ一人の女性が大量の紙の束を抱えてやってきた。

「まだ終わらないんですか？」

「まだ終わらないんですか？」

「ああ。来客があつてその間中断してた」

「来客？」

「メガテクボデイの営業の鮫洲という男だ。明日のデモに、何人か人員を割いてくれるらしい」

「ありがたい話ね。NOBなんて、こちらから連絡してもなしのつづでなのに」

「NOBは古きよき体面を気にする会社だからな。面倒なことには、巻き込まれたくないと思つているんじゃないのか」

女性は、床に置いてある段ボール箱に書類をどきりと置いた。手を段ボール箱の中に突っ込んで、きれいに詰めなおす。

「ピラはこれでよしと。あと何かありますか？」

「横断幕は届いているよな？」

「んー、見てきます」

女性は部屋を小走りに出て行った。
すると電話が鳴つた。男性は電脳から出た。

「義体自由運動です。……。はい？ あんた、誰なんだ？ ……。それは脅しのつもりか？ あつ、おい！」

女性が戻つてきて、言つた。
「どうかしたんですか？」

「へんな電話がかかつてきた。明日のデモを中止しろとかなんだか」

「反義体団体ですか？」

「かもな。最近結構物騒な連中もいると聞くが、明日のデモには高性能義体者ばかりを揃えているから、仮に銃撃戦になつたとしても大丈夫だろうよ」

「警察も周囲にいるわけですしね」

「警察はどちらかといえば、こつちの動向を監視するんだろが…そこ誰かが何かを仕掛けてくることは考えにくい…いや、あるとしたら…」

「あるとしたら？」

「それはモノホンのテロリストだ」

二 過去

丸の内署内の女子ロッカーに大森はいた。自分のロッカーを開ける。

中には、クリーニングの包装に包まれた制服が吊るされていた。大森はそれを取り出して、まるで反物を見定めるかのように両手で持ち上げ持ち、見つめた。

「コレを着ることになるとはね…」

東京、汐留のオフィス街の一角。カフェに、菅野と神奈川がいた。二人とも黙つていて、神奈川はうつむいている。

「申し訳ないのですが…これが現実です」

菅野が口火を切つた。
神奈川は、うつむいたまま答えない。

「耳の肥えたあなたのファンは、満足しないでしょう。そんなものを出すことは、私としても納得いかない」

神奈川はうつむいたまま答えない。
「そう功をあせることはないじゃないですか。時間をかけてゆつくりと取り戻していけばいい。焦る必要はないんです」

「そうだな…とはいえ当座の生活費を稼がなければならぬから、何か考えないといけない」

菅野はさすがに、それには答えなかった。
「妻も心配しているようだ…どうして僕は、こんなにも焦っているんだろうな？」

「なまじ手が動くようになってしまったからこそ、できるはずだと思つてしまふんじゃないですか。当然でしょう」

神奈川は思わず考え込んだ。もしあの事故の後、手が全く使えない障害者になつていたら、今の自分は何を考えているだろうかと。ピアノのことを必死に忘れようとしていたかもしれない。いや、絶対そうに決まつている。

「動くなら、出来ないはずはない。ですが、あなたのその両手は、今までは全く別のものだ。それを受け入れられないと、後々もつと辛くなるかもしれない」

菅野の物言いに、神奈川は少しカチンと来た。

「何が言いたいんだ。結局復帰はできないかといいたいのか？」

「そうじゃありません。前と同じだと思わず、変化に順応していただくさいといっているんです」

神奈川はその言葉に思わず口をつぐんだ。確かにその通りだ。前と同

じではないのだから、同じ方法が通用するわけはないのだ。
「変化に順応か…あの事故からまだ三ヶ月しか経ってないなんて自分でも信じられないよ」

「同感です」

菅野は切ない表情で短く答えた。そして、椅子にもたれかかり天空に向かつてそびえるビル郡を仰いだ。

「人間の欲望は、どこまで続いていくのでしょうかね。天に届くビルを作り、自らの失われた身体も作れるようになってしまった」

神奈川は何も言わない。

「人間は神と同じ領域に足を踏み入れてしまった。その天罰が、いつか下るような気がしてならないんです」

「僕のしたことは間違いだ、と？」

「いえそうではなくて…」

菅野は、単に二ヒリズムに浸りたかっただけなのだ。神奈川を助けた技術を否定したつもりはなかったのだ。

「君はさっきから僕を否定してばかりいるな。不愉快だ」

菅野は慌てて言った。

「気を害したならば謝ります。僕は一般論を言ったんだ」

神奈川は、椅子から立つと黙って財布から札を取り出し、乱暴に机に叩きつけた。店内の客が、騒然となった。

「また連絡する」

と言って神奈川は立ち去った。

神奈川が札を置いたテーブルは、手の形にへこんでしまっていた。

大きく開いた穴から数々の魂が落ちていく

でも世界は手を伸ばしさえすれば届くん

新しい世界に向かうとき俺を王者にしてくれよ

平凡な生活なんて退屈だけ

スーパースターなんて死後の世界みたいなもの

前に進むほどきつくなるだけ 女はホットになっ

一度失敗したら全てが終わりなんだ

西から東までライブ会場で女どもが寄ってきて

世界をまたにかけてるとか言われるけど

それが孤独な旅路だったことは神のみぞ知る
家からも遠ざかり 父親ヅラもできやしない
家に戻っても 娘の顔も忘れちまいそう
鼻をつまみ 冷水を浴びせられるから

女どもはもうお前を必要としない もう冷めた製品だし
次の流行のトンマに向かったのさ

頭からまつかさかさま もう全然売れやしない

そうして人生のソープオペラは花開く

よくある話さ でもビートは続いていくんだ

丸の内署の屋上に、大森がいた。パンツスーツの制服を着て、皇居周辺の夜景を眺めている。

『野比さん、見えてます？』

『ぼつちりだよ。東京タワーがライティングしてるね』

『ええ』

『明日はこれでバックアップができるね。業務の合間にちらちら気にしておくからさ』

『心強いです』

あまり他人に関心を示さない野比も、大森のような人種は珍しかったとみえ、最初の頃によくやっていた些細ないたずらやイヤミは影をひそめていた。

そればかりか、懇切丁寧に大森にネットの中でのふるまいについて教え込んだりしていた。体育会系の根性を持ち、どんな形であれ打てば響く大森を教えるのは、野比にとっても面白くても面白いことでもあったようだ。

『それにしても、よく自分の視界を他人に見せる気になったね？』

野比は、勝手に大森の目に侵入した件については一生黙っているつもりだった。野比は野比なりに反省はしていた。

女性に関してデリカシーに欠ける自分を、野比は薄々気づいていた。いくら見た目が紳士でも、中身が伴わなければどうにもならない。

『今この瞬間、誰かがこの同じ景色を見てくれているんだと思うと、心強くなりませんか？ 一人ぼつちじゃないって思えるってことは』

大森らしい意見だ、と思いつつ野比は応答した。

『君は警視庁のシステムによってだって監視もされているし、警察に入った時点でもう事実上一人ではないよ』

大森はうつむいて『そうですね』と応答した。

『明日はあの、厚生労働省でデモがゴールか。何事もないといいね』

『反義体団体からの妨害なんかも考えられるんですけどすよね？』

『明日に関しては正式な声明は発表されていないが、事後に出すこともありえるし、まだ予断は許さないね』

『野比さん』

『ん？』

『全身義体化して後悔したことはありませんか？』

『：俺の生い立ち知らないの？』

『あんまり：すみません』

『俺は六歳の時に全身義体になったんだよ。それも、事故がきっかけだった。選択の余地はなかったんだ』

『それって、野比さんの意思とは関係なしに、ってことですか？』

『そうだね』

『酷い話ですね：』

『ひどい話？』

『だってそうじゃないですか。命を助けるためとはいっても、決める権利は本来本人にある筈です。大人だったら、生身のまま死にたいと思う人もいるかもしれない：でも六歳じゃ、そんなことも理解できないし、できて意思なんて受け入れてもらえないでしょうけど：』

『：嬉しいよ』

『え？』

『そんな風に同情してくれるなんて、そんな人今まで一人もいなかった。ただの一人もね』

大森はため息をついて夜景を再び眺めた。野比は、今までどんな人生を送ってきたのだろうか。大企業の御曹司の生活など知る由もないが、

案外孤独だったのかもしれない：。

品川は丸ノ内署から出て、東京駅方面に歩いて行った。そこから中央線に乗り、吉祥寺で降りれば品川と野比が住む寮がある町だった。

最近はどこに行っても「無料では」煙草が吸えないため、品川は早く

帰りたくて仕方がなかった。JRだけは最後の砦だったのだが、結局全面禁煙となってしまった。新幹線もだ。

丸ノ内南口から駅に入るうとした品川に、女性の声が聞こえた。

「生まれ持った身体で一生を終えましょう。機械になってまで生き伸びたりせず、運命を受け入れるのです」

品川は、ちらりとそちらを見た。ビラを持った三十代くらいの女性が駅の入口でビラを配っているのだった。品川はその女性の方に歩いて行った。

女性は黒髪を腰くらいまで綺麗に伸ばし、薄ピンクのワンピースを着ていた。

「どうぞ、生命の会です」

といて女性チラシを渡そうとした。が、品川の手は背広の内ポケットに行っていた。取り出したものを両手で縦に開くと、女性は見開いた。それは警察の身分証だった。

「警察のモンだけだね、非義体化運動のNGOだったら、明日はここにいない方がいいよ」

「そうですね。分かっています」

女性は即答だった。一応自らを取り巻く社会情勢については理解しているようだ。

品川は、女性が杖を持っていることに気付いた。

「足は怪我？」

「：リユーマチです」

リユーマチは不治の病とされていたが、二十一世紀初頭に原因遺伝子が発見されたことにより、今では治る病気となっていた。

「若いのに：遺伝子治療も受けないの？」

「ええ。自然に手を加えないのが会や私のポリシーですから。それに、障害は不自由ではあっても不幸ではありませんし」

淡々と語る女性の顔を品川は見つめた。不便であっても不幸ではない、

か。全身義体化精神の対極をいく言葉かもしれない。

どこまでも、速く、正確に、効率よく、強力に。

かといってそれが幸福に繋がるかといえ、そうとは言い切れない。

世界はいつ頃から、この信念に基づいて動くようになったのだろうか。

少なくとも品川が子供の頃は、まだ違っていたような気がするのだ。

「…それ、くれる？」

「はい、ありがとうございます」

女性は笑顔でチラシを品川に渡した。

「俺は義体化も電脳化もしてないんでね」

「そうなんですか！ 是非入会していただけると嬉しいです」

品川は苦笑いしながら

「残念だけど、職業上の理由で無理かな。まあ頑張つて」

という駅の方の入口の方歩いて行った。

「はい、ご忠告ありがとうございます」

背中にかげられた声は、確かに生身の人間のそれであった。

品川の表情は、何故か薄く笑っていた。

本誌専売

■小町亭既刊発行物紹介

□一次創作（オリジナル）

『水と炎』 文庫、各巻500円 1巻〜4巻（全7巻予定）

自然物や人工物を司る「物神」という女神と、それに守られし、呪文を用いて神の力を行使できる「術者」が織りなす大河シリーズ第四作目。

レアレス公国。辺境の地で生まれ育ち、炎の神「カーミラ」に守られる少年キト・ナジヤはその能力を国の為に使う代わりに、病気の父を治療してもらうことになる。一方レアレスの中でも最も影響力を持つレジストン財団の御曹司、カルーア・レジストンもまた、生まれつき水の神「ウオーラ」に守られる術者だった。二人の少年が出会い、様々な術者と国同士の思惑が絡み合う。近代ファンタジー。

□二次創作（海外ドラマ「24」[TwentyFour]） 一般向け

『Distorted pentagon（歪んだ五角形）』 A5版、500円

高校三年生のジャック・バウアーは同じ学校に通うマリリンと付き合っていた。

休憩しにふらりと立ち寄った美術準備室で出会った、不可解かつ無礼な女は自らを「テリー」と名乗った…

…全てがバウアーになる…

ジャック、フィリップ、グラハム、マリリン、テリー。五人の思惑が事態を思わぬ方向へと導いてゆく…

参考文献

- 警察官になるには 宍倉正弘著 ペリかん社
公安警察スパイ養成所 島袋修著 宝島社
別冊ベストカー警察マニア！ 三推社
凶解雑学警察のしくみ 北芝健著 ナツメ社
戦う男の制服凶鑑 桜遼著 フィールドワイ
働く男の制服凶鑑 桜遼著 フィールドワイ
日本の警察解体新書 日本警察組織研究会
（株）笠倉出版社
凶解ナノテクロジーのすべて 川合知二 工業調査会
凶解ナノテク活用技術のすべて 川合知二 工業調査会



連続刑事アクション小説

BODY WILD Vol.1

著 者 東京小町 (とうきょうこまち)

作 画 神威なつき (かむい なつき)

銃監修 狩野フエタロ (かりの ふえたろ)

2010年12月29日 初版1刷発行

発行者 小町亭

印刷 文伸印刷 (株)

製本 文伸印刷 (株)

発行所 一次・二次一般向け同人小説サークル「小町亭」

tokyo_komachi@7.so-net.jp

<http://www1.to/komachi-tei/> (メール送信フォームあります)

©Tokyo Komachi 2010

※落丁・乱丁本はお取り替え致します。まずはメールにてご連絡をお願い致します。

※Webページでは

- ・無料体験版 (PDF書類) の配布
- ・DL販売 (PDF書類) のご案内
- ・イベント参加情報
- ・作品情報

などを掲載しております。是非ご覧ください。